ポケットを膨らませて

その夏、札幌に「祭」を見に来た。

案内人のやすさんは、定年して札幌の実家に戻ったが、昔は競馬記者だった。

「アメリカやフランスは夏は避暑地で競馬をやるんですってね。日本なら札幌ですね」

私の知ったかぶりをやすさんは即、見抜く。

「そんな呑気なことを言ってると痛い目に遭うぞ。

札幌記念はおまえみたいな本州からの旅行者を楽しませようと、

人気のない馬が頑張るんだから」

「馬に人気なんて分からないでしょ」

即座に言い返したのも、有馬記念を勝ったマツリダゴッホが出ていたからだ。

マツリダゴッホはゴール前で五番人気馬にクビ差かわされた。

やすさんはズボンのポケットをジャラジャラ鳴らしながら払い戻しから戻ってきた。

「馬単で取るとは、さすが元競馬記者」

「俺がノリを買わないわけないだろ。あんちゃんの時から応援してんのに」

「勝ち馬って、ダービーで偶然空いてたユタカが乗ったくらい、持ってる馬なんですね」

「なんだよ、おまえさんも取ったのか？」

「取るわけないじゃないですか。僕はマツリを見に来たのに」

夕食をご馳走になり、改札まで見送ってもらった。

財布はすっからかんなのに満たされたのは、やすさんと来年の再会を約束したからか。

勝ったタスカータソルテがイタリア語で

「ポケットいっぱいの幸せ」という意味だと知ったのは

少し眠くなった、東京便の待合室に入ってからだ。

文：本城雅人

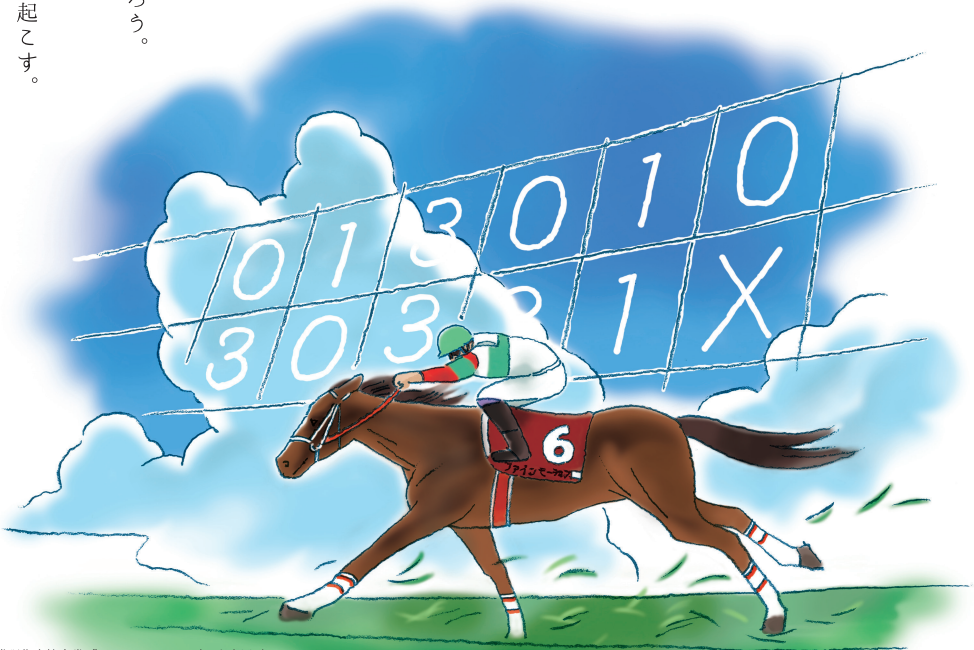
1965年神奈川県生まれ。産経新聞に入社し、浦和総局、サンケイスポーツで野球、競馬などを取材。2009年に『ノーバディウズ』でデビュー。17年『ミッドナイトジャーナル』で吉川英治文学新人賞を受賞。18年『傍流の記者』で直木三十五賞候補。競馬小説『あかり野牧場』など著書多数。

画：倉橋寛之

1972年北海道生まれ。札幌を中心にアートディレクター、イラストレーターとしてデザイン・広告業に従事。2009年TOKYO ADC（東京アートディレクターズクラブ）ADC賞受賞。現在、株式会社9Bデザイン代表。

美しい夏の終わり

子どもの頃は、甲子園の決勝戦に夏の終わりを感じていた。
大人になって、そこに札幌記念が加わった。
何年かに一度、二つのイベントがぶつかる年がある。
僕がはじめて北海道の地を踏んだ２００４年８月22日がまさにそんな一日だった。
唯一の牝馬、ファインモーションが一番人気に推されたこの年の札幌記念。
札幌競馬場のスタンドには、僕も含め、ラジオを聴いている人がたくさんいた。
遠く甲子園で、駒大苫小牧高校が激戦を繰り広げていたからだ。
レースの方は武豊を背にしたファインモーションが
鮮やかな捲りを決め、並み居る牡馬を一蹴した。
一方の甲子園では、駒大苫小牧が北の大地にはじめての優勝旗をもたらした。
北海道中が盛り上がったに違いない。
競馬場のスタンドも大いに沸いたし、僕もまた大きな声を張り上げていた。
しかし、最終レースを迎えた頃には、僕は感傷的になっていた。
レースは、試合はこんなにも盛り上がったのに……、いや、盛り上がったからこそだろう。
藻岩山から吹く風を、馬場に差す西日を切なく感じずにはいられなかった。
スーパーＧⅡに前哨戦、生ファンファーレ……。札幌記念はいくつものイメージを呼び起こす。
それでも、僕にとっては変わらない。夏の終わりと、儚さだ。
きっと祭りは盛り上がるほど、その後の儚さはひとしおだ。
さぁ、熱く盛り上がれ。
２０２２年、札幌記念――。
今年も美しい夏の終わりに立ち会いたい。



文：早見和真
1977年神奈川県生まれ。『イノセント・デイズ』で日本推理作家協会賞、『ザ・ロイヤルファミリー』で山本周五郎賞、JRA賞馬事文化賞をW受賞。『店長がバカ過ぎて』で20年本屋大賞9位。初のノンフィクション『あの夏の正解』は21年Yahoo!ニュース本屋大賞ノンフィクション本大賞にノミネート。最新作は『八月の母』。

画：倉橋寛之
1972年北海道生まれ。札幌を中心にアートディレクター、イラストレーターとしてデザイン・広告業に従事。2009年TOKYO ADC（東京アートディレクターズクラブ）ADC賞受賞。現在、株式会社9Bデザイン代表。